

# キャスターよ！背広をぬごう

—『テレポートTBS6』の原点 —

中村登紀夫 (TBS・WOWOW)

背広をぬいた山本キャスターと岩崎真純さん



題字 中川順

みんぐる 3う民放史

首都圏初のローカルニュースワイド『テレポートTBS6』(18:00~18:30)の開始は30年前の昭和50年(1975)10月6日。NHKは「なんで俺たちがやらなかつたのか」と悔しがつたと聞く。地域に生きるテレビの姿勢を示すとともに、続く18:30からの『ニュースコーブ』とあわせて、夕方6時台をキャスター＝ニュース時間帯として開拓する画期的な編成で、もつた。今、民放の夕方ワイドニュースに昔日の面影はない。記憶は薄れているが、30年前の熱気は記憶に残したい。本稿は、昭和53年2月に出版したテレポートTBS6篇『関東人間模様』の拙稿に若干手を入れ、あとがきを添えた。

ニュースキャスターの背広をぬがせたのは、日本では私がはじめてだと思う。何をツマラヌコトをと言われるかもしれないが、私はこのことを誇りにしている。

「ニュースなんだからマズイですよ」、あるとき、「たまにはキャスターも背広をぬいだつていいじゃないか」と言つたらこう拒否された。それがニュースの格調なのだろうか。それともニューススタジオという非人間的な空間が格好を

要求するのだろうか。

この夏、キャスターの背広を脱がせる、51年5月、毎日新聞の記者に話したら「革命です。ネットニュースでやつたら、夏、背広を着ている職場の人は喜ぶだろうナ。日本の服装習慣が変わるかもしれない」。スタジオを人間的な空間に変えたい、私はただそれだけだが、結果として服装革命になるなら、それはそれで素晴らしい。

暑い夏、キャスターが背広をぬぐーそれは受け手と生活感覚を共有することだ。たかが背広でも、私にとっては“伝える”ことの本質にかかる問題なのだ。

### テレビニュースは

『テレビポートTBS6』には二つの課題があつたと思う。第一は勿論、地域情報媒体としてのテレビの在り方を探ること、もう一つは“伝える”ということは何なのかを探すこと。つまりテレビの原点に立つてニュースを考え直すことは、試行錯誤を重ねたあげく、『ロカルに生きる』新しいラジオの

世界を築いた。原動力となつたのはパーソナリティという個性豊かな人格の発見であり、電話、TBS 950といつたラジオと市民の交流のための新しい手段の開発であった。同じように、原点に立つテレビは、地域社会に対する一方的な送り手ではなく、市民との相互の交流と共に輪つながる新しい情報分野を開拓しなければならない。ラジオという地域情報媒体にいた私にとって、これはゆるぎない確信であった。ローカルのテレビにとつてはラジオはまたとなつてニュースのTMがレコード化されることがあつたろうか。

私はテレビポートのオープニングを夕陽のVTRにしたかった。大洗の夕陽、夢の島の夕陽、歩道橋の夕陽、夕陽には人間のさまざまな想いがありドラマがある。だがこれが原則のニュースということでは撤回した。ただその想いは今のが原则のニュースにも受け継がれている—銀座の街角、人待ち顔のOLや地下鉄に急ぐ人びと、いかに語りかける何かがなくてはならない。語り手も同じである。キャスターには、普段はそうではないのニュースを伝えています”といふ



取材中の山本キャスター

語りかける何かがなくてはならない感のある画面に小室等の曲が流れても一日が終わつたといつた生活は、番組開始の翌年初夏、荻窪の通りを歩いていると、2階の窓辺でギターを弾く青年がいた。曲は

顔になつてしまふ人が多い。あの顔は送り手と受け手をはるかな距離に遠ざける。一段と高い所から、そんな印象をぬぐえない。

私が欲しかったのは、泣き、笑い、とまどい：受け手と同じ場に立つて、普通の人のような弱さもある、ニュースキャスターという

よりは、パーソナリティと呼べるような人だった。初代の撫養慎平氏も二代目山本文郎アナウンサーもその点では同質である。誘拐された赤ちゃんが無事親の



初代キャスターの撫養慎平さんと  
高橋加代子さん

ない“権威”ではない人がそこにいたからである。涙はニュースの中味を伝えてはいない。しかし、記者がレポートした事実が持つ意味を、あの涙ほど的確に伝えたものはないと私は信じている。

視聴者を一步でも現実に近づけなくてはいけない

テレビニュースの現場中継ほど活き活きとした画面はない。事件現場は勿論、午後6時に生中継で生きる素材は“生”で伝える。最初の6ヶ月で中継車のスタンバイは120回を数えた。情報を伝えるということは、諸々の事柄を間違えなく伝えるだけで十分だと考えたらそれは送り手側だけの論理だ。視聴者をより一步現場に近づけなければならぬ。面白く見せる努力をして視聴者に媚びたっていいではないか。

この番組が報道局内にカメラを置き編集現場からニュースを伝えているのも現場中継の一つとして考えたものである。いち早くニュースが入るという臨場感が視聴者の期待を高める。ニュースの伝え手に、警視庁クラブ歴9年という料治記者を選んだのも画面に現場

の匂いが欲しかったからだ。事件、事故の背景やその後を伝えるときは、取材したVTR素材



料治直矢さん

受け手との間に  
共感が生まれる  
これこそがニュースだ

新らしい方法として記者自身が被取材者の立場に立つ体験レポート

手に抱かれた特集へ幸恵ちゃんを追つて（50・10・8放送）のあと、撫養さんが涙で言葉を詰まらせてしまつたとき、正直、私はシメたと思った。それまでのニュースキャスターのように微動だにし

も試みている。へ9階からハシゴ車で救出大作戦(50・11・2)では、火事でビルの9階に閉じ込められた人をハシゴ車で救出するという消防訓練を記者が被験者になつてレポートした。

—そろそろ火災発生時刻です。  
9階の窓(下をのぞく)、私はここから救出されるのですが、下を見ると人間が豆粒です。コワイなア：サイレンです、ハシゴ車が来た  
ようですが、窓から人が笑つて見ていますが、冗談じゃない(ふるえ声)ホントにコワいんだよ。あッ、ハシゴがのびてきました。あれッ、そんな向こう、もつとこつち(絶叫)一メートルもあるんじや落ちちゃう。あッ、下へ行つちやつた。こんなことしてたらホントの火事なら死んじやうよ(憤懣)あア、やッとまた来ました。これ乗り越えるの、えッ、命綱ないの！

救出時間は一秒も狂わせませんと消防は言つたが、3分の予定が18分費やしている。消防士が被験者なら一メートルの空間を渡つたかも知れない、従来の記者取材の方法では到底表現できない映像である。

情報は、送り手があつて受け手

があり、受け手が何らかの意味で送り手に共感するとき、はじめて情報としての価値が生まれる。

信濃川河川敷といえば田中金脈の原点だ。52年10月末ここが払い下げになった。企画会議でスタッフが言つた「何万平米つていうけど、誰か見たことある：オレ、みてみたんだナ、視聴者だつてそううだと思うんだ」。よしつ、料治に歩いてもらおう。

へ金脈の原点！信濃川河川敷ルポ(52・11・10)は、石にツマヅキ、草をわけ、国道を横切り、端から端まで料治直矢が一日がかりで歩き、走つた。その広大さは、こうした手法以外には表現できなかつた土地の広大さを実感し、い。地図フリップだけではつかめない。身の廻りの珍しい話、面白い話

だけではない。へわが街の危険箇所(55・7・6)では、市町村でもそれが不当に安く払い下げられるなかつた土地の広大さを実感し、—送り手と受け手との間の怒りのかせないものである。

身の廻りの珍しい話、面白い話だけではない。へわが街の危険箇所(55・7・6)では、市町村でもそれが不当に安く払い下げられるなかつた土地の広大さを実感し、—送り手と受け手との間の怒りのかせないものである。

身の廻りの珍しい話、面白い話だけではない。へわが街の危険箇所(55・7・6)では、市町村でもそれが不当に安く払い下げられるなかつた土地の広大さを実感し、—送り手と受け手との間の怒りのかせないものである。

身の廻りの珍しい話、面白い話だけではない。へわが街の危険箇所(55・7・6)では、市町村でもそれが不当に安く払い下げられるなかつた土地の広大さを実感し、—送り手と受け手との間の怒りのかせないものである。

受け手は送り手でもある

かつて、受検勉強に疲れた青少年たちは、孤独な心情を手紙やイラストに託して深夜放送のパーソナリティに送つた。これらの手紙が電波に乗つて同じ環境にある多くの仲間たちに共感の輪を広げて



つかみきれない大雨危険地帯情報を特集した。視聴者情報による全調査特集は記者クラブでは手に入らない貴重なものである。

### 人びとと同じ場に立つて 点のテレビから面のテレビへ

48年度NHK国民生活時間調査で見ると、午後6時～6時30分の東京圏(東京、埼玉、千葉、神奈川)の人々の生活動態は次のようなものである。

①主婦は93%が在宅。30%が、ながらではない視聴者である。

②勤め人(男女)の30%はすでに帰宅しているが、テレビ視聴はその1/6～1/4である(15分単位)。

③東京23区では、25歳～60歳の男性の72%が在宅している。

スタッフ全員がようやく勢ぞろいしたのは番組開始の1ヶ月半前だつた。全員でこのデータを前に「午後6時の関東ローカル」とは何かを熱心に討議した。

今も確たる答えは得られないままに五里霧中の毎日である。たどり2年以上たつて視聴率が20%を記録する日もあり、15%をこえる日も多い。番組開始時の50年10月平

均の4・9%が、52年10月に12・7%になつた。私たちの歩いてきた道が間違つていなかつたことだけは確かなようである。

伝え方ばかりではなく、素材の面でも、スポーツ、芸能、民俗：

あらゆる分野を探し廻つた。共通するのは常に視聴者と同じ場に立つことだ。

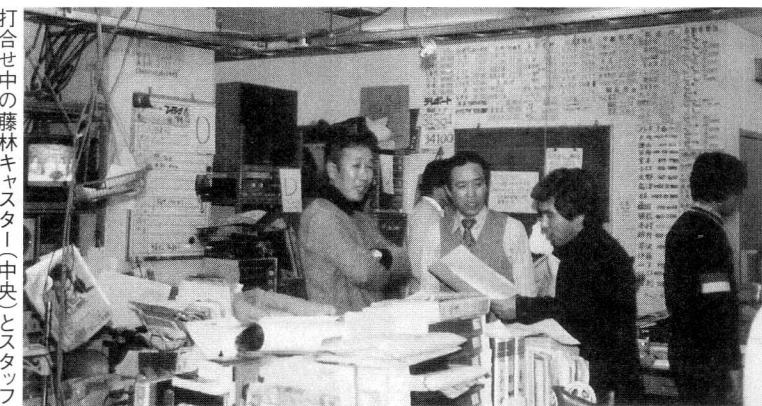
『『あとがき』』  
つということであつたと思う。それは赤坂という点のテレビではなく、関東という面のテレビであることだ。

### 『『あとがき』』

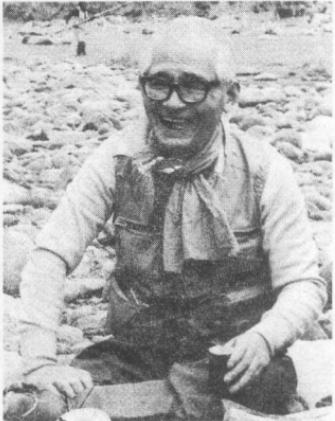
『『テレビポートTBS 6』』スタートの頃、夕方6時台前半は子どもの時間帯だつた。営業はスponサーが降りると言い、報道局内も看板の『JNNニュースコープ』にいささかの影響も与えることは出来ない、ローカルにはさけないという声が大半を占めていた。

スタッフは、制作、スポーツ、ワイドショーなどニュース人間が知らない苦労をしてきた人たちが必要だ。それが私の考え方で、ニュースからは精鋭を6名指名した。わずか11名の混成チーム。企画会議も侃侃諤諤、当初はなかなか噛み合わなかつたが、ワイドや制作の人間はニュースを学び、ニュース人間は、映像の構成、カメラワークを学ぶ。飲み、かつ激論の毎晩だつた。私が言つたのはひとつ言「いつか、スコープの視聴率を抜こう」。

だが私は生みの親に過ぎない。



打合せ中の藤林キャスター(中央)とスタッフ



「釣り談義」の稻葉修元法務大臣

育ての親は次のリーダー三好和昭君だ。彼は『関東人間模様』のあとがきに書いている一ブラウン管の奥で、ぼくらは日夜、傷つき、悩んでいる。何をどう伝えればニュースの本質に迫れるのか。まだ歴史のないテレビに「これぞテレビニュース」という定形などない。肥沃な耕土か、不毛の荒野かわからぬが、ぼくらの前には無限の地平が広がっている。

過去の遺産など知っちゃいない。過去から「飛んで」しまえばいいのだ。カミシモを着てムツカシイことばかりヅツのが脳じやない。中学生もOLも、お年寄りも、誰もがすぐ判りかつ共感を呼ぶニュースは作れないものだろうか。

三好のリーダーシップで、釣りを楽しむ間に軽妙洒脱な語り口で

政治、社会を切る「稻葉修の釣り談義」。行政は勿論、保育関係者も実態を把握していなかつた「ベビーホテル」キャンペーンなど数々のヒット企画を連発して、結果的に『ニュースコープ』の視聴率を押し上げた。

更に、数局しかこの時間帯にローカルニュースワイドを編成していないなかつたJNN各局もあいつぎ「テレビポート」を編成、系列総体の取材力は格段と高まつた。

番組開始15年後、TBSの午後6時代は60分の『ニュースの森』になり『テレビポートTBS6』は終わる。もう一度言いたい。今、民放の夕方のワイドニュースは、これがニュースだろうか。



「ベビーホテル」受賞祝い  
中央は堂本暁子プロデューサー